

STRING THEM ALONG



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第1回

旅に呼ばれ、世界に飛び立つということ

2010年5月号から43回にわたり、楽曲を一曲ごとに掘り下げて紹介する(Aアメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ)を続けたが、今回からはひとつのテーマを掲げ、それに沿ったいくつかの曲を紹介していこうと思う。1回目のテーマは旅。海外に飛び立つ若者たちの曲を集めてみた。60〜70年代、多くの若者たちがバックパックを背負って世界へ旅立った。アメリカ、ヨーロッパだけでなく、日本も同じだったと思う。なぜ旅に出るのか。これにはそれぞれ理由やきっかけがあったに違いない。俺の場合は小学生のとき、父の本棚に入っていた小説からその種を埋め込まれたのだと思う。ジョン・スタインベック、アーネスト・ヘミングウェイ、そしてもちろんジャック・ケルアックといった作家の作品だ。中でも特に好きだった小説は、植民地をテーマにしたもの。自国ではない場所に住む人たちのストーリーが一番好きだった。寂しさや、本当にここにいなくてもいいのかという悩み。俺の身体に流れている外国人の血が、共感を呼んだに違いない。サマセット・モーム、ラドヤード・キップリング、ポール・ボウルズ、ジョージ・オーウェル、ジョセフ・コンラッド。そして、アメリカ

のSF作家ロバート・A・ハインラインの、宇宙で生まれた人間の話『異星の客』は、すごく琴線に触れるところがあった。きつと俺も日本に住む日米ハーフの人間として、何か共通するような部分があったのだろう。とはいえ、エキゾチックな国の話を読むのは好きだったが、当時は自分が実際にバックパックを背負い、それまで読んできた世界に旅出つとは思っていなかった。

最初に旅に出たいと思ったのは、この曲を聴いた十代はじめの頃だ。クロスビー・スティルス&ナッシュの69年発売のファースト・アルバムから最初にシングル・カットされた、グレナム・ナッシュ作の「マラケッシュ・エクスプレス」。ナッシュがまだホリーズにいた66年、モロッコを訪れた時に書いた曲だ(ホリーズ時代は未発表。カサブランカからマラケッシュに行く列車



Crosby, Stills & Nash
"Crosby, Stills & Nash"
Atlantic [US] ●SD8229
[1969] ▶アトランティック(ワーナー) ●WPCR15252

incl. 'Marrakesh Express'



Donovan
"Open Road"
Dawn [UK] ●DNS3009
[1970] ▶Repertoire
[Germany] ●RR4880

incl. 'Riki Tiki Tavi'

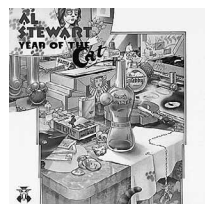
での旅を歌っている。まだ中学生の俺にとって、モロッコは見たことのない夢の国だった。67年にローリング・ストーンズがモロッコに遊びに行った話は有名だが、俺が当時読んでいた作家ポール・ボウルズの本にも、モロッコがある北アフリカの世界がよく出てきた。そして、ハンフリー・ボガードの映画『カサブランカ』のロケ地でもある。アメリカ人にとっては遠くてロマンティックな国だ。この曲は、車窓を介して触れたモロッコの風景や香りを描いている。いわば、ツアーリストの目線に立った曲だ。「マラケッシュ・エクスプレス」が全米28位とヒットしたおかげで、当時のアメリカの若者の頭の中にはモロッコ=エキゾチックな国とインプットされていた。

北アフリカでもう一つ思い出すのは、アル・ステュワートの「イヤー・オブ・ザ・ザ・キャット」。曲の最初で、こう歌っている。『タイムスリップしたような国に、ハンフリー・ボガードの映画に出てきそうな朝』と。同じモロッコの話だと思うが、こちらはツアーリストではなく、バックパックパッカーの感じなんだ。曲の主人公の男はそこに住む、お香とパチョリ(*註)の匂いが

する外国人の女性と出会う。この時代のバックパッカーは、よくこのパチョリをつけていた。バックパッカーの旅では長い間、風呂に入れないことがあるので、身体の臭いを消していたんだろう。彼女が教えてくれるのは、猫の年に来たということだけ。彼女は絹のドレスを着て彼を市場に誘い、青いタイルの壁に隠れているドアの中に連れていく。彼は彼女の不思議な世界に入つてしまい、いつのまにかそこに住んでしまうというストーリーだ。曲のなかではモロッコという地名は出てこないが、青いタイルといえば、モロッコが想像できる。

また、こんな曲もある。ドノヴァンが70年に出した『オープン・ロード』というアルバムは、タイトルからわかるように旅がテーマで、インド絡みの話がたくさん入っていた。中でも、シングル・カットされた

「マラケッシュ・エクスプレス」を聴いて旅に出たいと感じていたが、ジャクソン・ブラウンのファースト・アルバムが発



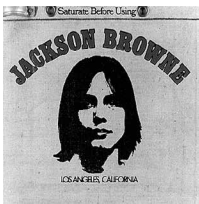
Al Stewart
"Year Of The Cat"
RCA Victor [UK] ●ORS1082
[1976] ▶EMI [EU] ●S354562

incl. 'Year Of The Cat'

*註1=インド原産の植物。ここでは、その精油から作った香水を意味する。

売された72年、高校1年だった俺は、具体的には何も考えていなかった。ただ、このアルバムにはいくつか遠い国のことを思わせる曲が入っていた。その中のひとつ「ソング・フォー・アダム」は、ジャクソンの昔の友人アダムが、知人からの手紙に自殺したと書かれていたことを曲にしたものだ。その中で、かつてジャクソンがアダムの旅の目的地であるインドに魅せられ、彼と一緒に旅に出たことが歌われている。俺は、そこで歌われている旅に呼ばれたので一緒に出かけた」という一節にすごく惹かれたんだ。旅と呼ばれる」とは、いったいどのような現象なんだろう？ やがて、それは俺の身にも起こった。

高校3年生になって、俺は新宿の開拓地というロック喫茶でアルバイトを始めた。そこには、たくさんさんの旅人が訪れた。当時は、南国の夏が暑過ぎるからと、インドを



Jackson Browne
"Jackson Browne"
Asylum [US] ●SD5051
[1972] ▶アサイラム (ワーナー)
©WPCR78049

incl. 'Song For Adam'

仕方がないから、近所の店でワインを買い、それを持って浜辺で踊ったよ(笑)。
マタラはヨーロッパに住む人たちが、寒い冬から逃れるために訪れる南の町。アメリカの軍人も、バックパッカーもたくさんいる。お金がある人は小さなバンガローを借りて、お金がない人は海岸で寝ている。村にある崖の斜面にはやぐらのように彫られた洞窟があり、ベッドのような石の台があった。そこに寝る人も多かった。俺も泊まろうとしたが、なんともいえない不気味な雰囲気を感じてやめた。崖がいつ崩れるかわからないし、狭苦しさも感じたからだ。その後、村の人に聞いたら、その洞窟はかつて死体を安置する場所だったという。道理で嫌な感じがしたはずだ。

歌の中では、主人公がマタラの次にはローマかアムステルダムに行くかもしれないと歌われている。俺と同じ、世界旅行の途中だったのかもしれない。ただ、清潔な白いシャツやお洒落なフランスのコロンが恋しい」とも歌詞にあるから、バックパッカーの貧乏旅とは大違いだね(笑)。

旅の帰りに、いろいろと気づくことがあった。それは一人でこんな旅をすると、同

はじめ各国から日本に出稼ぎに来ていたんだ。女の子たちはクラブで働き、男たちは英語の先生かコンパ(何百人も入る広いバーのこと)やトランプのディーラーとして働いていた。俺もそんなお客と話すようになって、いろいろな旅の話聞くことができた。まだ若い俺にとって、彼らの話はすごくロクックだった。俺がそれまで聴いてきた旅の曲の歌詞や、読んできた小説そのままだった。インド、モロッコ、タイ、そして、シルクロードが舞台の話だ。

開拓地での体験で旅への欲求がさらに膨らんでいたちょうどそのころ、中学時代の友達が親の仕事の関係でインドに住んでいるという手紙が届いた。俺はピンと来た。これこそが、ジャクソンの歌詞にあった旅に呼ばれる。出来事に違いないとね。すぐに俺は友達に会いにインドに向かい、そこから遂にはバックパックを背負って世界を一周回ることになる。途中、先のジャクソンのアルバムのことをよく思い出した。ジャクソンに「旅からの声」をもたらしてくれたのはアダムだったが、俺にとってはインドに住んでいた友達だったわけだ。

● 俺はその後、インドから南欧に向かった。

● じ年齢の昔の仲間とは、世界感が違ってしまふということだ。

ヨーロッパを後にして、俺はアメリカへ向かった。そしてニューヨークからカリフォルニアに行く途中、中学時代の彼女のところに寄り、居候をさせてもらったんだ。彼女にとつて俺はもう不思議な人間になっていたのだろう。旅の話に興味深く聞いていた彼女は、俺を見る目が完全に変わったようだった。実は当時はわからなかったが、87年になって、スザンヌ・ヴェガの『孤独(Solitude Standing)』からシングル・カットされた『ジプシー』を聴いて気づいた。スザンヌは旅をしてきたある男に会ったことを歌にしていた。遠いところから来た彼は、目の中に絵が見える。ガゼを作るような細い糸で、様々な面白い話を聞かせてくれる。彼の顔を見るときまた若い、たっさんの知恵が身体からにじみ出ている。



Suzanne Vega
"Solitude Standing"
A&M ●SP5136 [1987] ▶A&M
(ユニバーサル) ©UICY25307
incl. 'Gypsy'



Joni Mitchell
"Blue"
Reprise [US] ●MS2038
[1971] ▶リプリーズ (ワーナー)
©WPCR14096
incl. 'Carey'

ギリシャに着いて、寒さから逃れようと一番南のクレタ島にフェリーで向かった。島についてヒッチハイクをしていたら、一緒にトラックの後ろに乗っていた旅人から、南にある小さな村の話聞いた。そのマタラという名前の村は、ジョニ・ミッチェル『ブルー』(71年)の中の「ケアリー」に出てくるので、記憶にあった。マタラにあるマーマイド・カフェという場所で、恐らくミッチェル本人であろう歌の主人公は、ケアリーという男性に惚れてしまう。彼と一緒にワインをたらふく飲みながら、マタラの月の下で踊るといふ展開だ。早速、俺もその村に行ってみることにした。マタラは小さな入り江にあり、曲に出てくる通り、マーマイド・カフェも実在した。でも、そこはバックパッカーが飲めるような安い店ではなかった。俺は、ジョニが当時既にロクック・スターだったことを忘れていたんだ。

旅をしてきて、切なさを漂わせているその人に抱いてもらいたいと彼女は歌う。そう、旅に出た人は、そうでない人と違うんだ。旅に出たことで、得体の知れない大きな物を手に入れてしまう。どこに行っても、集まりの中心に立つ道化師みたいだね。

「ジプシー」が発売されたころ、俺の旅の時代は終盤になっていたが、この曲を聴いたとき、昔の彼女と重なった。その後、旅をしなくなった俺は、ラジオのインタヴューでスザンヌに会ったことがあった。そのとき、「ジプシー」について話した。この曲は俺のことを歌っているんじゃない？ ってね。スザンヌには笑われたけど、そのあとライヴに行ったら、この曲を俺にデカイケイトしてくれた。そのパフォーマンスがDVDとCDに残されている(※註そののが、俺の旅絡みの思い出の一つだ)。

旅に出ると、人間は変わる。一人旅は、自分でも想像しなかった世界に足を踏み入れることだ。ドノヴァンの「リッキ・ティッキ・ターヴィ」で歌われるような教訓を得られるのも、一人旅ならではの。でも、誰だって旅に出るわけではない。そして、旅はいつまでも続けるものでもない。ただ、呼ばれたら素直に旅に出るといい。